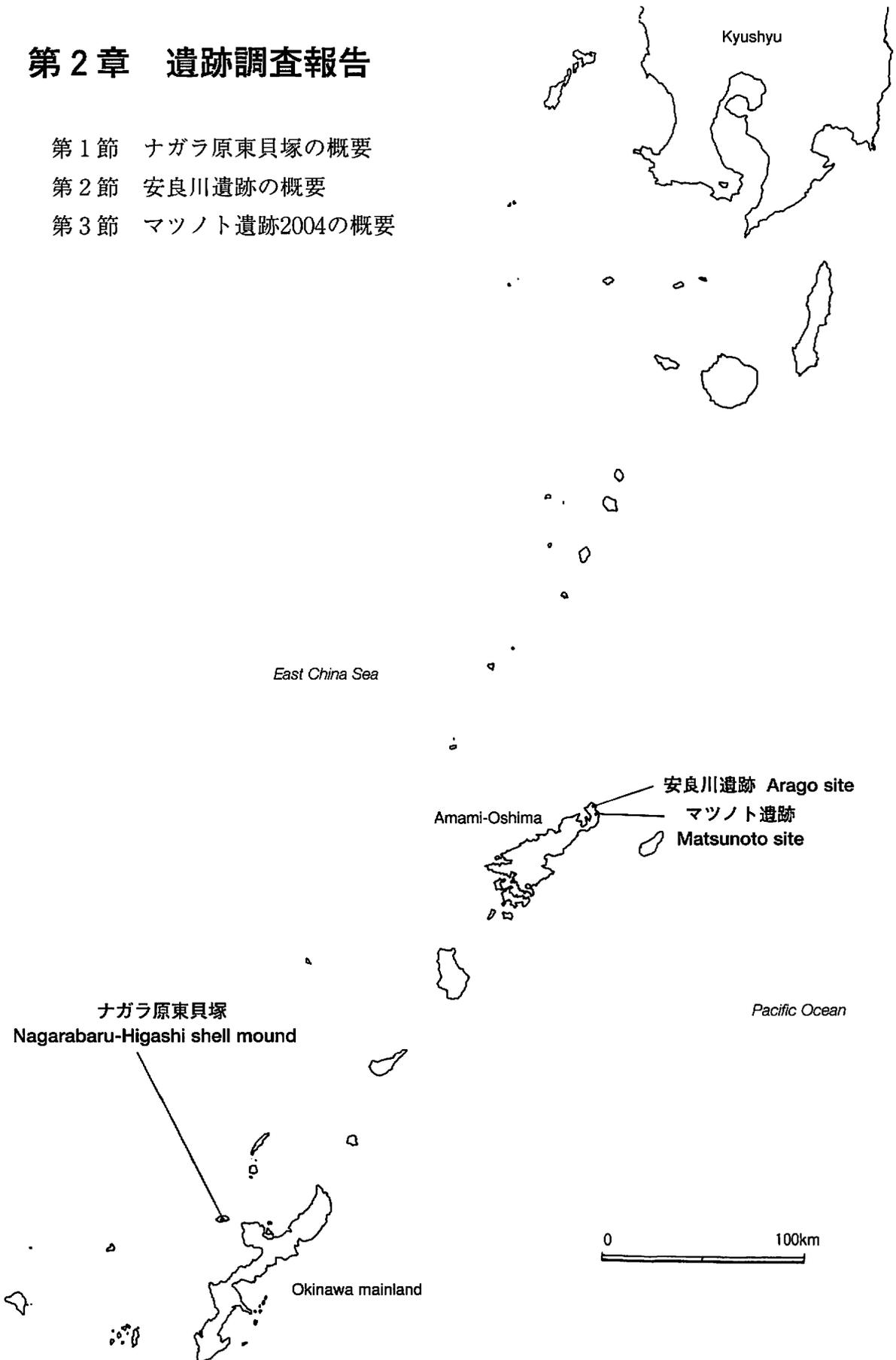


## 第2章 遺跡調査報告

- 第1節 ナガラ原東貝塚の概要
- 第2節 安良川遺跡の概要
- 第3節 マツノト遺跡2004の概要



## ナガラ原東貝塚の概要

木下尚子  
熊本大学

KINOSITA Naoko  
University of Kumamoto

### 1. 遺跡の位置と環境

ナガラ原東貝塚は、沖縄県国頭郡伊江村字川平に所在する。遺跡は沖縄本島西北の離島伊江島の南海岸に面し、海岸砂丘が内陸平地に移行する標高7 m 前後の緩傾斜地に位置している (図3)。伊江島は本部半島備瀬崎の西5 km にある、長径8 km の楕円形の平坦な隆起サンゴ島である。島の大部分は石灰岩に覆われるが、基盤をなす伊江層が城山や北海岸など4箇所にも露出する (木崎1985、p. 106)。島の南側には砂丘とサンゴ礁が発達し、沖縄貝塚時代の遺跡が集中している。ナガラ原東貝塚もその一つである。遺跡の西側に大きな地下水流路があり、ナガラ原東貝塚人もそこからの湧水を利用したことが推定される (松本2000)。遺跡は現在タバコ畑となっている。

### 2. 遺跡の調査

遺跡は1977年に発見され (伊江村教育委員会1979)、1997年に伊江村教育委員会が8 m<sup>2</sup>の試掘を行い、沖縄貝塚時代中期と後期後半 (以下沖縄を省略) の包含層の存在を確認した (伊江村教育委員会1999、pp.61~65)。その後1998年から2001年まで熊本大学考古学研究室が発掘調査し、これまでに合計153m<sup>2</sup>を発掘していた (藤江1999、谷2000、新里2001、木村2002、檀2003)。6次にわたる調査の結果、遺跡は少なくとも南北30~40m、東西60~70mの範囲に広がり、貝塚時代前期~中期と後期の2時期の遺跡であること、後期の包含層に貝殻等食料残滓の集積のあることがわかった。貝塚時代前期~中期の層は地山直上に堆積し、同後期層は無遺物層であるVI層を介してV層以上に堆積する。その中心をなすのがIV層であり、その下部 (以下IV下層とする) に大型貝類が集中する。IV下層の自然遺物集中箇所等についてコラムサンプリングを実施し、脊椎動物遺体、貝類遺体、植物遺体の分析資

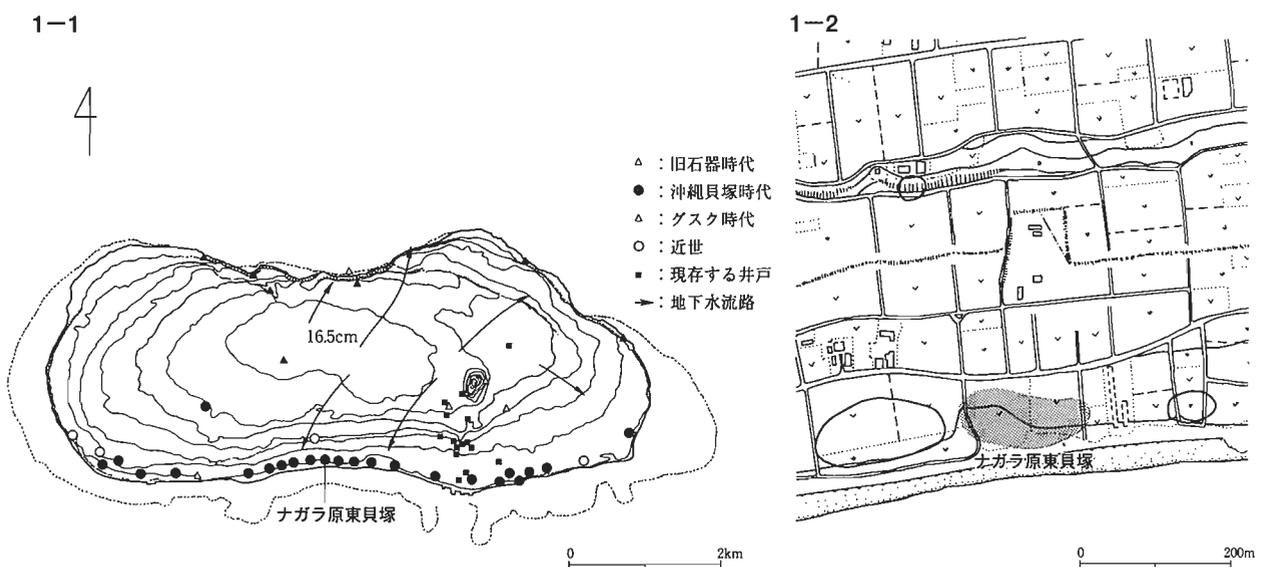


図1 伊江島とナガラ原東貝塚

1-1. 伊江島とナガラ原東貝塚 1-2. 遺跡周辺の地形

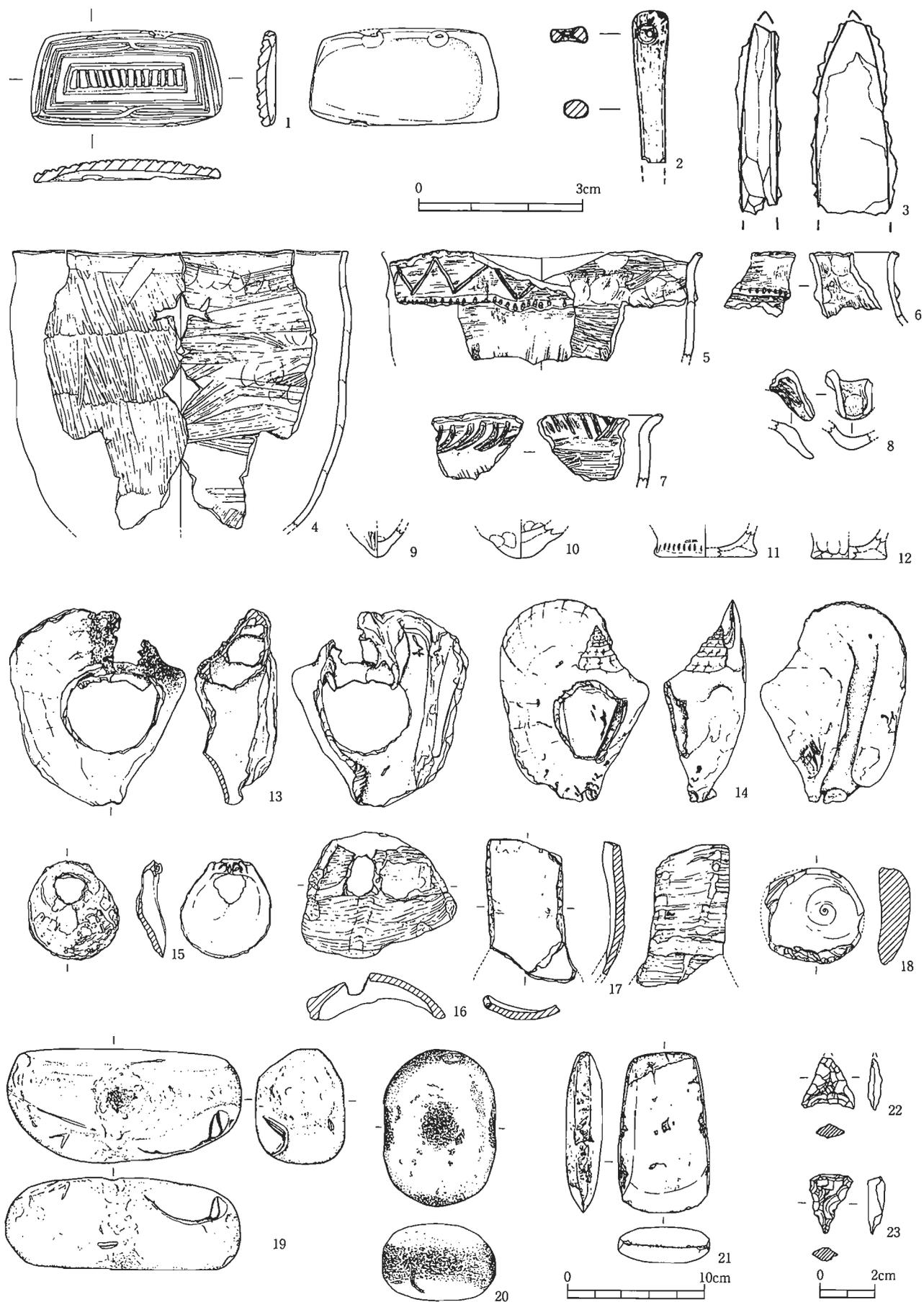


図2 ナガラ原東貝塚のおもな出土遺物 (I~IV層)

1. 貝符 2. 骨製針 3. 尖頭状扁平鉄製品 4~12. 土器 13・14. ゴホウラ加工品 15. 有孔ウミギクガイ製品 (貝錘) 16. 有孔ヤコウガイ製品 (貝錘) 17. ヤコウガイ製品柄部 18. ヤコウガイ蓋製敲打器 19. クガニイシ形石器 20. 敲石 21. 石斧 22. 石鏃 23. 石錐

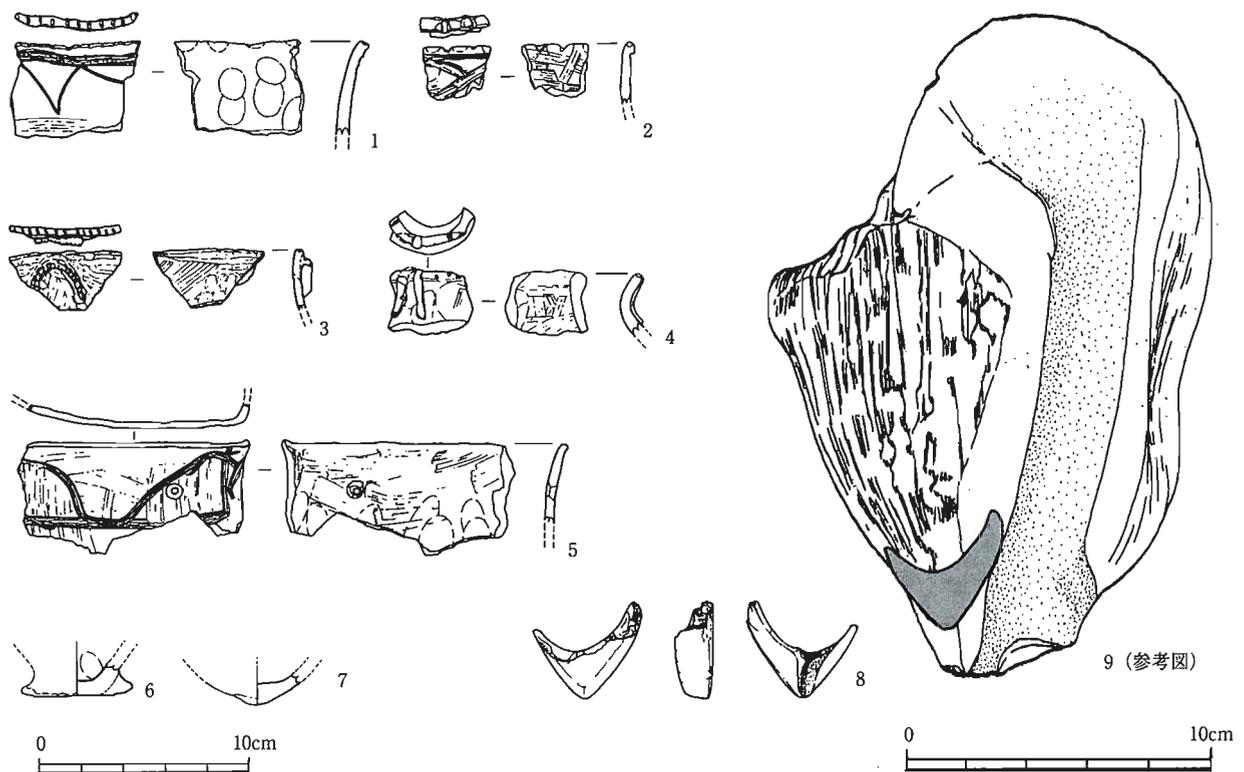


図3 ナガラ原東貝塚Ⅳ／Ⅴ層出土遺物（2002年調査）

1～3. 甕 5～6. 片口土器 6. くびれ平底 7. 尖底 8. ゴホウラ貝輪 9. 8の使用部位

試料とした。Ⅰ～Ⅲ層は積年の耕作による攪乱層であるが、出土遺物はⅣ層と変わらない。調査は北1西1グリッドにおいて、Ⅳ層とⅤ層の漸移層（以下Ⅳ／Ⅴ層）に達し、この一部を調査したところで調査は休止している（図3参照）。

### 3. 遺構

Ⅳ層下のⅦ層面からピット状の掘りこみのあることをトレンチ断面で認めているものの、自然遺物の集積以外にはっきりとした遺構は確認されていない。自然遺物の集積は、見かけ上貝類が主体である。それらは少なくとも厚さ20cm、100m<sup>2</sup>の範囲に密に分布している。サラサバタイ、シャコガイ類、マガキガイが目立ち、巻貝のほとんどが破碎されている。そのほか焼けた魚骨、獣骨が混在することから、これらを食料残滓の集積と判断した。こうした集積の形成過程を調べるために、シャコガイの右殻と左殻の合弁関係を調べた。これまで左右殻合計1718個のうち219組438個体が合弁し、合弁率は12.7%である。合弁したシャコガイの範囲、および集中して出土したマガキガイの出土状況から、本遺跡における貝殻の廃棄単位は、水平距離60cm、レベル差5cmの範囲におさまると推測される。本遺跡のⅣ下層はその単位での廃棄が繰り返されることにより形成されたと想定できる。また互いに7mはなれて合弁したシャコガイがあり、少なくともこの範囲（直径7m）が一括廃棄の広がりであったといえる。

### 4. 遺物

人工遺物（図4） 土器、石器、貝製品、骨製品、鉄製品等を得た。土器はアカジャンガー式土器の特徴をもつものが含まれるが、これに該当しない尖底土器も一定量存在している。石器では石皿・台

石4、敲石・磨石29、クガニイシ形石器5、石斧1、石鎌2、石錐1、石材16が出土し、貝製品では貝錘110、貝匙15、貝皿40、貝符1、貝符未成品1、貝玉3、ヤコウガイ蓋製敲打器1、加工されたゴホウラ・アツソデガイ10を得た。その他骨針3、有孔土製品1、尖頭状で扁平な鍛造鉄製品1がある。用・見崎遺跡に比べると、ヤコウガイ製品が非常に少なくゴホウラ加工品が目立つ。貝符は広田上層タイプである。そのほか2002年の調査時、IV/V層において、ゴホウラ腹面貝輪の一部が出土した。その形態は西日本の弥生時代終末期から古墳時代はじめの貝釧に共通し、注目される(図3-8)。

**自然遺物** イノシシ、ウミガメ、ヤマガメ、大小の魚類、貝類、炭化したイネ、コムギ等を検出した。イノシシはリュウキュウイノシシの可能性が高いとされ、これが陸棲動物骨ではもっとも多い。魚類ではサンゴ礁やイノーに棲むブダイならびに多様な小型魚が混在する。貝類では小型の二枚貝であるリュウキュウヒバリガイとミドリアオリガイが大半を占めることが特徴である。植物ではこれまでに、イネの穎果22、籾殻121、コムギ1、タブノキ14等を検出した。土壌および出土土器によるプラント・オパール分析では、土壌、土器双方ともにイネのプラント・オパールは検出されなかった。

## 5. 時期

以下の検討によって、IV層は6世紀前後に比定するのが妥当と判断される。

**編年的検討**：IV層の土器にはアカジャンガー式土器に該当するものが有文土器の20%存在する。しかし尖底土器も全体の24%あって、平底土器のみで構成されるアカジャンガー式土器そのものとは言い難い。後期土器の変化傾向が尖底土器から平底土器に向う方向性をもっている(村上1999)ことを勘案すれば、IV層の編年的位置付けは、アカジャンガー式より古くなる。

**貝符による検討**：ナガラ原東貝塚IV層出土の貝符は、広田上層タイプである。この貝符の時期的検討に、対岸の兼久原貝塚の貝符が良好な比較材料となる。兼久原貝塚の貝符本貝符と同様、方形の枠を重層的に廻らす彫刻文様をもつ。兼久原貝塚では開元通宝が他の貨幣をまじえず単独で2枚出土しており、その形状は初唐の特徴をもつ。両貝塚の貝符を比較すると、兼久原貝塚の方が簡略化しており、本貝符より形式的に新しい段階のものと判断できる。兼久原貝塚の時期を開元通宝によって7世紀前後とみれば、本貝塚IV層の時期はこれより若干古くなる可能性がある。

**貝製品による検討**：ナガラ原東貝塚からは、ゴホウラ、アツソデガイを加工したものが10点みつまっている。これらはいずれも貝殻内唇部にゴカイなどの生息痕跡をもち、採集段階ですでに死んだ個体であったことがわかる。したがってその採集目的は、食用ではなく貝殻の利用にあったとみてよい。これらのうち8個は背面中央部に穿孔されており、腕輪を意識した加工痕と判断できる。しかしこの時期、沖縄諸島においてゴホウラ製腕輪の使用習俗はすでになく、こうした背面加工に対応する腕輪を消費していたのは、種子島広田遺跡人と九州・西日本の古墳時代人である(木下1996)。その使用時期は前者では4～5世紀以降、後者では5世紀から6世紀前半である。

**<sup>14</sup>C測定値** これまでに木炭による<sup>14</sup>C測定を、IV層で2例、IV/V層で2例、VII層で1例、それぞれ別の地点の試料でおこなった。結果は以下のとおりである：

IV層 1570±60BP (cal AD385~625)、1490±60BP (cal AD430~660)、1620±80BP (cal AD245~620) (いずれも補正年代値、95%probability、以下同様)

IV/V層 1640±40BP (cal AD350~530)、1650±40BP (cal AD370~540)

VII層 2780±40BP (cal BC1005~825)

IV層の数値に注目すれば、5世紀後半から6世紀後半の数値を得ることができる。

以上から、本遺跡Ⅳ層の所属時期は、7世紀前後に比定できる兼久原遺跡を若干遡る、6世紀の一時期と判断したい。

## 6. 成果

**6世紀前後の生活跡** ナガラ原東貝塚は、6世紀前後の生活跡を遺す海岸砂丘上の遺跡である。少なくとも径7mの広さの廃棄単位を含む、食料残渣廃棄の集積が認められている。貝類等は平坦な砂丘後背地に原位置を保って堆積しており、集積は比較的短い時間内に形成された可能性が高い。

**環境** 当時の遺跡は、やや開けた海岸林に隣接し（黒住2000）、沿岸部にはススキとタケが混在していたことが推定された（宇田津ほか2001）。またリュウキュウヤマガメの存在は、当時島内陸部に森林域のあったことを示唆している（当山ほか2001）。当時の海域環境は良好で、貝類組成は現在と同様であったと推定されている（黒住1999）。

**穀物の存在と地中の攪乱** Ⅳ層のフローテーションによって検出されたイネとコムギは、第3章5、6節に示すように土壤中を垂下した現代の混入物である可能性が高いことが、その後の検討で明らかになった。砂丘地にも「見えない攪乱誘導網」が普遍的に存在していること、つねにこれを意識して発掘調査をしなければならないと認識したことは、本調査の成果の一つといえるだろう。

**土器編年** Ⅳ層に包含される土器のほとんどは、その下部（Ⅳ下層）に集中し、これらはシャコガイの合弁によって同時性が保証される径7mの食物残渣の廃棄跡において検出された。廃棄跡には後世の攪乱は認められず、貝殻や土器にもそうした痕跡がないので、この遺構は廃棄されたときの状況をそのまま保っているとみていい。廃棄された貝殻等に混在して、沖縄貝塚時代後期の後半を代表するとされる平底のアカジャンガー式土器と、同じく前半を代表する尖底土器が多数検出された。この事実は、この二つの形態が同時並存していたことを示している。時期差とみていた形態差が、かならずしもそうでないという可能性を、ナガラ原東貝塚の包含層は示している。

**漁法** 出土した脊椎動物骨の重量比は獣骨より魚骨の方が多く、当時の生活が漁労に比重をおいたものであったことを推測させる。魚骨の分析から、その漁法には①サンゴ礁やイノーでの魚種選択性の低い漁法、②大型ブダイの選択的漁法、③沿岸浅瀬における回遊性小型魚の漁、という3パターンが推定されている（樋泉2001）。

**季節性** ニシン科の魚骨が集中して出土したことから、沿岸の浅瀬に來遊する小型魚をねらった季節的な漁の存在が指摘された（樋泉2001）。8～9月にサンゴ礁を回遊し始めるミズン、秋から春にかけてサンゴ礁の沿岸からやや沖合いの浅瀬を回遊するヤマトミズンが考えられている（樋泉2001）。季節性が具体的に指摘されたのは重要である。

謝辞：本稿の図1、2は、新里亮人氏によるものである。記して感謝する。

### （参考文献）

伊江村教育委員会1979『伊江島ナガラ原西貝塚緊急発掘報告書』

岩滝町教育委員会2003『大風呂南古墳群』岩滝町文化財調査報告書第15集

宇田津徹朗・藤原宏2001「ナガラ原東貝塚の出土土器および遺跡土壌のプラントオパール分析」『考古学研究室報告』第36集、熊本大学文学部考古学研究室、pp.58～66

木崎甲子郎編著1985『琉球列島の地質誌』沖縄タイムス社

木下尚子1996「古墳時代南島交易考—南海産貝貝剣と貝の道を中心に—」『考古学雑誌』第81巻第1号、pp.1～81、日

本考古学会

木村龍生編2002「I ナガラ原東貝塚4」『考古学研究室報告』第37集、熊本大学文学部考古学研究室

黒住耐二1999「特論2. 1998年のナガラ原東貝塚調査で得られた貝類遺存体（予報）」『考古学研究室報告』第34集、  
熊本大学文学部考古学研究室、pp.40～48

黒住耐二2000「3. 1999年度のナガラ原東貝塚調査の食用貝類遺存体（予報）」『考古学研究室報告』第35集、熊本大  
学文学部考古学研究室、pp.45～54

新里亮人編2001「I ナガラ原東貝塚3」『考古学研究室報告』第36集、熊本大学文学部考古学研究室

谷直子編2000「I ナガラ原東貝塚2」『考古学研究室報告』第35集、熊本大学考古学研究室

高宮広土2000「ナガラ原東貝塚出土の植物遺体（1999年度）」『考古学研究室報告』第35集、熊本大学文学部考古学研  
究室、pp.55～62

檀 佳克編2003「I ナガラ原東貝塚5」『考古学研究室報告』第87集、熊本大学文学部考古学研究室

樋泉岳二2001「2. ナガラ原東貝塚の水洗選別試料より検出された脊椎動物遺存体（第3報）」『考古学研究室報告』  
第36集、熊本大学文学部考古学研究室、pp.40～46

当山昌直・平山廉2001「3. ナガラ原東貝塚から出土したカメ類について」『考古学研究室報告』第36集、熊本大学文  
学部考古学研究室、pp.47～49

広田遺跡学術調査研究会・鹿児島県立歴史資料センター黎明館『種子島 広田遺跡』

藤江望編1999「I ナガラ原東貝塚」『考古学研究室報告』第34集、熊本大学文学部考古学研究室

村上浩明1999「考察」『考古学研究室報告』第34集、熊本大学文学部考古学研究室、pp.16～17



写真1 ナガラ原東貝塚Ⅳ層の貝層検出状況（2004年7月）